台湾大学図書館・田代文庫の八重山資料の翻刻への道のり

安渓遊地

はじめに：台湾大学図書館での再発見からインターネット公開への歩み

日本民俗学の父である柳田國男は、「島の三大旅行家」と題する記事の中で「最も忘却し難い近代の俊傑」として、トカラ列島の記録を残した白野夏雲（しらのかうん）・田代安定・『南嶋探験』を書いた笹森儀助の三人を紹介した（柳田、1934）。

田代安定は、明治の中頃に三度にわたって八重山を訪れ、そのころの人と村と自然のようすの詳しい記録を残した。彼は、1882（明治 15）年 8 月の 3 日間の予備調査のあと、1885（明治 18）年 7 月から翌年 4 月までの 10 か月間の本調査をおこなった。しかし、その詳細は、長く忘れられたままだった。

田代は、台湾が植民化された 1895（明治 28）年からの後半生を台湾総督府の林業関係の技術職として過ごした。1928（昭和 3）年の彼の死後、田代の資料は台北帝国大学に寄贈され、日本の敗戦に伴って現在の台湾大学に受け継がれた。それらは台湾大学図書館で 1990 年代後半に再発見され、関係者の努力によって、今回出版される運びとなったものである。

戦後の田代再評価の先駆者は、1971 年から 72 年にかけて報告を書いた八重山出身のジャーナリスト三木健（みきたけし）氏である（三木、1980 に所収）。しかし、田代が作成し、政府や沖縄県に提出したという 50 冊余りの村ごとの「巡検統計誌」や地図などの報告書そのものの行方は分からなかった。台湾大学での田代資料の本格的な整理が始まったのは、2000 年代に入ってからだった。三木氏は、台湾大学図書館を訪れ、整理が始まったばかりの状況を「幻の八重山資料の再発見」として新聞や雑誌に報告した（三木、2004）。人類学史研究の中生勝美教授は、田代の太平洋での調査研究まで視野に入れた伝記をまとめた（中生、2011）。東台湾調査報告は台湾でも復刻され、インターネット公開後は、田代の手書き文書を掘り下げた研究も現れてきている（やまだ、2022 など）。

私は、妻の安渓貴子とともに、1974 年から八重山の人と自然の歴史の研究に着手していたが、当時、八重山の田代の「巡検統計誌」は、日本国内に 3 冊だけが所蔵されていた（宮本・安渓、2025）。残りを探す手立てもないまま年月が流れたが、2011 年以降に転機が訪れた。山口市在住の先史学者であった國分直一博士（1908–2005）の蔵書と資料の台湾大学図書館への寄贈に協力したご縁で、学生たちと同図書館の特蔵組に通い始めたのだ。そこで出会った中生教授から、特蔵組に田代安定資料がまとまって収蔵されていることを教えられたのである。そうした流れで田代文庫のデジタル化とインターネット公開へ向け

た目録整理に取り組む司書の洪淑芬博士と林慎孜氏のお手伝いをさせていただく機会を得た。目録作成を担当した陳偉智氏は、その後博士論文を執筆し、田代安定の全体像を把握するための現在のところもっとも信頼できる研究となっている（陳、2020）。

台湾大学図書館には 100 人もの司書がいる。そして、日本では引取先が見つからず廃棄されるしかない何万冊もの本や資料を積極的に収集し迅速に整理・公開している。さらに、内容が確認され、著作権やプライバシーの面で問題がないものは、デジタル化し図書館内公開、大学内公開を経て、インターネット上での一般公開をどしどし行なうのが台湾大学図書館の基本方針である。文教予算を指標にすれば、文化力において日本は台湾に大幅な遅れをとっていることを痛感させられる。図書館はすべての人に平等にサービスを提供する機関であって、特定の研究者の業績づくりや、一部の出版社の利益のためのものではない、というのが特蔵組で学んだ鉄則だった。田代文庫や國分文庫を教材に、学生たちとともにこのことを心に刻んだ私と妻は、田代安定の資料がより多くの人に利用できるインターネット公開をめざして、八重山の島々のみなさんに教えられたことや、ベルギー・フランスやアフリカで学んだ人類学・植物学・民族生態学等の知識を総動員して協力した。

以下、田代安定の人と学問、とくに彼が八重山に惹きつけられたわけを紹介し、彼の沖縄・太平洋・台湾での研究とその位置づけ、今このような形で国際的な協力のもとその一部を印刷に付す学問的・社会的な意義を紹介する。

生年と名前

沖縄県立図書館に田代の自筆履歴書の下書きがある。それによれば、田代安定は、幕末の安政 4 年 8 月 21 日（新暦 1857 年 10 月 8 日）に鹿児島市鍛冶屋町に生まれた。名前の欄に毛筆で「旧称直一郎」と加筆してある（天野鉄夫文庫）。

「安定」の読み方について、1928（昭和 3）年 3 月 16 日の彼の死去を報じた同年 3 月 23 日付けの『鹿児島朝日新聞』は、「やすさだ」と振り仮名をつけた（名越、2017）。1882（明治 15）年に田代が作成した『鹿児島県柑橘図』（台湾大学図書館田代文庫 CY0024848[1]）の扉には、Y. Tashiro と記している

[1] 台湾大学図書館の田代文庫のアドレスと検索方法は、以下の通りである。.....
そこでは、田代資料の分類用にアルファベットの略号を用いている。田代没後すぐの 1929 年と 30 年に収集された資料は CY で始まる。2000 年代に開始された整理では、書籍は B、ノート類は N、植物に関する記述は P とされ、あとの草稿類を地域別に日本は J、台湾は T、太平洋は S とした。田代が収集・筆写した資料は O としてまとめられている。以下の本文中で、B010 等と示すのは台湾大学図書館の田代安定文庫の所蔵番号である。

ので、本人も「やすさだ」と称していたと考えられる。1884 年 11 月のパリでのノートには、Antéi Tashiro と書いている（N198）。海外では発音しやすい「アンテイ」と自称することにしていたのだろう。

田代は、1874（明治 7）年 1 月、18 歳の時に震卿と号した（B022）。1876（明治 9）年 7 月末の「山川紀行」では「甲川（こうせん）　田代」と書き（J065）、同年 8 月の「佐多紀行」では、「芋疇耕夫（うちゅうこうふ）」つまり、イモ畑耕す男、と署名している（J083）。その後は、生涯を通して「天剣（てんけん）」あるいは「天剣子（てんけんし）」と名乗り、漢詩など田代文庫にも多数の使用例が見られる。

本草学から博物学へ

彼が生まれた鍛冶屋町は、薩摩藩の下級武士が多く住んでいた。安定の父は、田代安治（1830–1907）である。安治の筆で『山海奇品図彙』という江戸時代の図鑑から、琉球国に産する海洋・陸上生物を抜き出した彩色写本が 1874（明治 7）年 8 月に作られている（B005）。薩摩藩時代に安治がどのような役職についていたかは不明だが、生物を描くその流麗な毛筆の運びは、後に博物学と呼ばれるようになる本草学の分野に彼が長く親しんでいたことを示している。安治は、1888（明治 21）年 3 月に、当時鹿児島県庁に勤めていた息子の安定の唐芋（サツマイモ）の品種ごとの特徴を記した報告への補いとして、苗床の作り方・芋の保存法・芋焼酎の作り方を書いて与えた（J042）。

前記の『鹿児島朝日新聞』の追悼記事に、田代は「幼いころ体が虚弱だったために、草木をもてあそび、その頃唯一の博物書であった本草項（ママ）目などを研究し、その方面でも驚くべき博識をもっていた」と書かれている。台湾大学の田代文庫には、李時珍（1518–1593）の『本草綱目』の和訳本が 25 冊あり（B010）、その多くは修理が難しいほど破損している。田代は、幼い頃から父親の蔵書で本草学に親しみ、父はまた草木虫魚の趣味を仕事にした息子を応援し続けたのである。

語学の才能

田代が頭角を現したのは、フランス語においてだった。彼は 1869（明治 2）年、数え年 13 歳の時、柴田圭三（しばたけいぞう、1839–1897）の私塾に入ってフランス語を学んだ。3 年後には、藩校の教授となった柴田のもとで、生徒でありながらフランス語の助教を勤めるほど上達した。柴田は、奈良生まれで、西洋医学を学ぶために 1860（万延元）年から長崎に滞在中に宣教師からフランス語を学んだ（奈良県庁、1909）。この宣教師は、パリ外国宣教会のルイ・テオドル・フュレ神父（Louis Théodore Furet, 1816–1900）だったと考え

られる。フュレ神父は、中国滞在中に香港の植物誌を作成し、その後日本の開国を琉球王国で待つ 6 年あまりの間に、当時の最新の機器を使って那覇の気象を記録し、さらに琉球王国の役人に請われて物理学や数学を教えた（宮里、2021）。柴田は、長崎のフランス領事館の通訳となり、1868（明治元）年には薩摩藩に通訳として招かれた（奈良県庁、1909）。こうしたいきさつで、田代が柴田から吸収したものには、フランス語だけでなくフュレ神父ゆずりの百科全書派の総合的自然科学も含まれることになった。

1874（明治 7）年 1 月、数え年 17 歳の時に、田代は柴田の「開物社」の社員として、前年に出版されたばかりのフランスの百科事典の一項目を訳した。冊子に序文を寄せた柴田は、田代の正確な翻訳には修正の余地がなく、自分の生徒として田代が植物学と動物学を特に好んだと述べた（B022）。田代は、同年山野を歩き、開物社の庭園に 100 種以上の樹木をはじめとする多数の有用植物を移し植えて、それらの和名と漢名にラテン名とフランス名を添えたリストを作成した（B042）。後に台湾恒春で熱帯植物園を開設した田代の実践的植物学は、こうして柴田のもとで育まれたのだった。

東京からロシア・ヨーロッパへ

田代は、1875（明治 8）年 4 月、内務省の博物館掛として東京で就職し、田中芳男局長（1838–1916）の指揮でわが国に博物館・動物園・植物園を創設するというプロジェクトの一員となった。同年夏には一月をかけて信州付近の植物採集旅行に出かけ（J124）、1878（明治 11）年の 4、5 月には、毎朝魚市場に出向いて海産物の種類を列挙し、珍品を標本として購入した（N040）。今でいうフィールドワークの対象が植物から水産物とそれを扱う人々にも広がったのである。

1880（明治 13）年、母が死去すると田代は鹿児島に戻り、県庁勧業課への出向となる。翌年には、内国博覧会への出品準備として鹿児島県内を歩く。野帳は本草学の伝統に沿い「採薬紀行」と題されている（N148 など）。1884（明治 17）年 5 月、田中芳男博物局長の推薦で、田代は、ロシアで開催される万国園芸植物博覧会への日本政府の担当者として派遣された。彼のフランス語と博物学の経験が評価されたのである。博覧会終了後、東アジアの植物学の先駆者のマキシモヴィッチ大学院教授（Karl Johann Maximowicz, 1827–1891）の教えを受けて、半年間サンクトペテルブルクに滞在。日本から来たこの青年が、当時知られざる日本の植物と、本草学以来の日本の植物学の長い伝統について、フランス語や図解を使った詳しい説明ができることを知って、教授と田代は互いに学び合い、時に激論を交わす関係を結んだ（松崎、1934）。田代は「大学院学友記状」とロシア皇帝からの神聖スタニスラス三等勲章（2394 号、

N129）を授与された。彼は、25 歳にして世界に通用するレベルの植物学と語学力を身に着けたのだった。

南島へのあこがれ

田代は、幼いころ勉学の暇に世界地図を広げては、日本の南の方にある宮古・八重山などの島々にあこがれた[2]。現地訪問の夢がかなったのは、1882（明治 15）年 8 月だった。マラリアの特効薬のキナノキ試植という用務の折に希望した出張だった。この旅では石垣島に 3 日滞在できただけだったが、精力的に歩き回り、帰ってすぐに開発へ向けた意見書（J121）を農商務省に提出した。マラリアを押さえ、西表島の石炭をはじめとして、様々な有用植物を育てる産業育成の方向を提言した。

1884（明治 17）年のロシア滞在に引き続き、翌年にかけて田代は、フランス・ドイツ・ベルギーを訪れて、造林や園芸学などの勉学を続けた。日本への帰路、マルセイユの港に向かう汽車の中で、1 人の乗客が彼に示した新聞の記事によって、田代の八重山への思いは再燃した。その記事は、当時清仏戦争のさなかで台湾を艦隊で封鎖していたフランスが「所属あいまいのマイコ島（宮古・八重山の総称）に船の修理場と仮病院を建設するならば好都合」という内容だった（J141、以下「取調始末」と略す）。

八重山の本格調査

田代は、1884（明治 17）年末に帰国すると、ただちに八重山の海防に着手すべしとする建議書を農商務省に提出した。内国勧業博覧会御用掛の渡辺洪基（1848–1901）の支持を得て、田代の八重山調査の実行が決定された。2 年前から沖縄県令だった西村捨三（1843–1908）のもと、兼任で沖縄県属（職員）となった。田代は、西表島の石炭開発を目指す鹿児島県人の林太助と沖縄県属の山田鉄一をメンバーに加え、1885（明治 18）年 7 月 7 日石垣島に着いた（J141）。以後 1 年半にわたる田代の八重山漬けの日々、彼自身の表現によれば「我ガ畢生ノ創業企図ノ関ヶ原的奮闘期」が始まった（「駐台三十年自叙史」）。

その膨大な調査報告は、今回始めてまとまって印刷される本書の内容を見ていただくのが早いが、そのあらましを、田代自身が 1893（明治 26）年 12 月に「現世ノ遺言」のつもりで書いた「取調始末」から抜粋しておこう。山田鉄一

[2] 田代の家では、安定の祖父の兄が難破して無人島で過ごしていたという伝承があり、田代が 7 歳のころ薩摩藩主の御側用人の重職についていた大久保利通が探索船を出したことがあった。後に田代が無人島だった大東島や尖閣諸島を訪ねた背景の物語である（「駐台三十年史」）。

は測量と地図作り、林太助は専門とする石炭の炭脈発見と港湾の計測を主に担当し、団長の田代が、その他の調査項目（地理、戸籍、租税、民情、習慣、史跡、物産、植民用地等）のすべてを担当することにした。沖縄県の製図係・友寄喜恒を新たに迎えたが、着任して 10 日もたたずに、持病が再発しやがて死亡してしまった。田代は、友寄の代わりとして八重山の役所に勤務する絵師の喜友名安信を招いた。現地の言葉や風習に詳しい地元の人物が必要だったために雇ったのが、田代が「土豪」と呼んだ豪傑の高嶺安道だった（N143-02、12 月 30 日の日記）。

実地調査は困難をきわめた。海岸の焼けた砂や川の泥の上を歩いて測量し、海岸の洞窟に寝たり、野生の植物をタバコや茶の代わりに使ったりもした。村で時間があるときには、高齢の村人を招いて、昔の台風や津波のことなどを聞き取った。

あらかじめ調査項目を各村の役所に通知し、受け取った報告を鵜呑みにするのではなく、実際に各家を回って確認し、ある家で聞いたことは別の家で確かめ、1 つの村の記録を他の村のものと照合したと田代は書いている。与那国島には船便の都合で行けなかったが、以下のような日程で、すべての有人島での調査を行なった。1885（明治 18）年 7 月 7 日から 27 日まで石垣島に滞在、7 月 28 日から 8 月 19 日までは、竹富島、黒島、波照間島を巡回し、8 月 20 日から 10 日間、西表島の南海岸から西北海岸をまわり、9 月 1 日から年末までかけて、西表島の山林・原野・沼沢地を歩き、明治 19 年の元旦は鳩間島で迎えた。1 月 11 日からは、石垣島、新城島、小浜島を調べ、4 月 27 日に八重山を出発し、5 月 1 日沖縄県庁に戻った。その間、数度の暴風雨を経験し、田代と林は疫癘症（えきれいしょう、悪性の流行病）のためほとんど危篤となったが[3]、健康を回復した（明治 19 年 5 月 26 日「復命書」、J206）。調査の終り頃に八重山を訪問した山縣有朋内務大臣に直接調査の概要を伝える機会も与えられた（「駐台三十年自叙史」）。

---

[3] 田代は、西表島東南部の仲間村で悪寒・発熱し、尿が茶褐色になる黒水熱と診断され、治療を受けた。当時まだ蚊が媒介する病気とは解明されていなかったが、マラリア蚊のうち、アノフェレス・ミニムス（*Anopheles minimus*）が媒介する、死亡率の高い熱帯熱マラリアに感染したらしい。1893（明治 26）年 5 月『南嶋探験』の旅に出る笹森儀助が東京で田代に面会して教えを乞うた時、田代は、疫癘の毒が慢性化して全快の見込みなし、と述べた（笹森、1982、9 ページ）。1915（大正 5）年 2 月に病気を理由に台湾総督府を退職した時の書類にも、慢性マラリア症の診断書が添えられている（中央研究院デジタル・アーカイブ）。現代の知識に照らせば、慢性化するのはアノフェレス・シネンシス（*A. sinensis*）の媒介する三日熱および四日熱マラリアであるから（安渓他、2007）、田代は複数のマラリア原虫の感染を経験していた可能性がある。おそらくこの経験から、田代は生涯、マラリアの特効薬キニーネが採れるキナノキの栽培に取り組んだ。

八重山調査の結果は、38 冊の巡検統計誌と地図を始めとして、50 冊に上った。それらは、農商務省と内務省に提出され、その結果を踏まえた提言を田代は「沖縄県管下八重山群島急務意見」（J099）と題して各大臣に配布し、八重山開発にただちに着手すべきことを熱心に働きかけた。同郷の鍛冶屋町出身で、郷中で親しく指導を受けた先輩の陸軍大臣・大山巌（1842–1916）や、やはり同郷の文部大臣・森有礼（1847–1889）、海軍軍人で逓信大臣の榎本武揚（1836–1908）らは、共感し応援してくれたが、伊藤博文総理大臣らの長州閥は、対外問題の解決を優先すべきとの姿勢で、中国を刺激する恐れのある八重山開発の着手に消極的だった。約半年にわたる働きかけの結果は、あたかも深淵に石を投げるように手応えがなかった（「駐台三十年自叙史」）。

森有礼文部大臣は、田代に政治情勢が変わるまで農商務省を離れて、しばらく文部省で働かないかと誘い、田代が学術調査に携わる道を準備してくれた。八重山の島司に任命されて島の産業を起こし、移民と近代化を進めて当時 3 万人の八重山の人口を 30 万人にするという田代の野望はこうして棚上げとなった。松方正義大蔵大臣の助言により、田代は 1886（明治 19）年末で農商務省を辞し、森の采配通り渡辺洪基（東京府知事を経て帝国大学初代総長になっていた）のもとで帝国大学の嘱託や、渡辺が幹事だった東京地学協会の報告主任等として学者の道を歩みはじめた。田代が政治家になって八重山開発の実務を遂行するという計画は、しかし、森が 1889（明治 22）年 2 月に暗殺されて水泡に帰した。田代は、この挫折の経緯を「1 度目の贔屓の引き倒し」と呼んだ（「駐台三十年自叙史」、ただし田代は森有礼の暗殺を明治 23 年 5 月と書いている）。

研究者として島々を巡る

不本意ながら学問に専念することになった田代は、1887（明治20）年から帝国大学の嘱託として八重山・宮古・沖縄島・トカラ列島の言語や習俗を研究した。今回は与那国島にも渡ることができた。西表島古見村の土器や、干立村の伝説などを、帝国大学の人類学教授の坪井正五郎が率いる東京人類学会の『人類学雑誌』に次々に発表した（東京大学理学部図書館所蔵田代安定資料）。『植物学雑誌』にも多くの報告を載せた。

1889（明治 22）年 8 月から翌年春まで、田代は海軍の練習船「金剛」に乗り組んでミクロネシア・ポリネシアの島々を訪問し、派遣元の東京地学協会などに多くの報告を寄せた。彼の調査方法は、基本的には八重山での研究と同じく、言語学的な調査によって、その島に住む人々の由来を見極め、植物とそれを生かした生活文化を、たくみなスケッチを交えながら記録するものだった。当時ヨーロッパでさかんに作成された植民地支配のための民族誌調査のマニュ

アルが日本に持ち込まれる以前のことである。世界的にも 1950 年代の半ばになってようやく現れはじめる言語人類学や民族植物学・民族医学の先駆けとなる研究手法を田代は独自に編み出していたのだった（田代文庫 S の部参照）。

時代は遡るが 1885（明治 18）年の田代の「八重山巡廻日記」の西表島の部（N142-2）を見ると、半分近くは植物名とその地元での呼び方や地名のリストで埋められている（本シリーズ第 3 巻に収録予定）。得意の語学と、本草学以来の調査手法を混ぜ合わせ、そこに坪井正五郎の自然人類学や、坪井が提案した「風俗調査法」といった最新の研究手法が加わって、田代の独自の報告は、植物学分野以外でも注目されるようになった。

台湾に渡りそこに留まる

森の暗殺のあと、田代は文部省から農商務省の嘱託に戻り、1892（明治 25）年からは、東京地学協会の嘱託として報告主任兼事務担当となった。

1894（明治 27）年 3 月、田代は 3 たび八重山開発の意見書を政府に提出した（J098）。5 月には、宮内省の御料林設置の願いを書いている（J102）。前年 12 月には遺言のつもりで八重山調査のいきさつを「取調始末」にまとめた田代は、最後の望みを宮内省に託したのだが、やはりのれんに腕押しだった。

東京地学協会の事務担当者として、台湾に関する講演会を催したりする中で、田代は、初代の台湾総督となる樺山資紀（かばやますけのり、1837–1922）から早晩台湾は日本の領土となる見込みだから、と『台湾府志』という本を貸し与えられ、これを熟読した。

1895（明治 28）年、田代は台湾が植民地化されるのにあわせて志願することにして、東京地学協会の副会頭だった榎本武揚に希望を伝えたところ「東京地学協会地理探検」として派遣という名目で西郷従道海軍大将に依頼してくれた。田代は、念願かなって陸軍雇員となり、澎湖諸島を経て台北に乗り込んで台湾総督府民政局員となった。担当は殖産部で、部長は樺山総督の甥で薩摩出身の橋口文蔵（1853–1902）だった。橋口の熱心な励ましによって、田代は台湾の産業の振興のために尽くすことを決意し、様々な提案をした。しかし、橋口は早くに死亡し、2 度目の「贔屓の引き倒し」となった。恒春の熱帯植物園が実現しただけで、元来農学分野が専門であったのに、畑違いの林学に打ち込んできたが、ついに自分のアイデアが総督府に取り入れられることはなかった、と田代は台湾での 30 年を振り返っている（「駐台三十年自叙史」）。

田代は、台湾に到着してすぐに岩手県遠野出身の民俗学者伊能嘉矩（いのうかのり、1867–1925）とともに台湾人類学会を創設した（T001）。各地の植物調査報告に続いて、八重山で行なったのと同じ方式による原住民族の言語と習俗等の調査報告を続けた。

東台湾での田代の調査結果については、やまだ（2022）は、田代の『台東殖民地予察報文』を巡って、田代文庫の手書き文書を読み取った研究を発表している。田代文庫のインターネットでの公開によって、それぞれの分野の専門家が、国際的な研究を通して、この忘れられた知の巨人・田代安定の再評価をしていく段階にようやく到達できたのだと考えられる。

晩年の田代は、郷里の鹿児島高等農林学校で 1910（明治 43）年から 6 年にわたって熱帯農学の講義を担当した（やまだ、2019）。1919（大正 8）年、台湾総督府を退職する直前、宮古八重山で上布の原料となる苧麻（ちょま）を、原住民族のすぐれた能力を生かして台湾の主力産業に育てるという意欲的な提案を自費出版した（田代、1917）。1921（大正 10）年、高雄州に開設されたキナノキの農場に勤め、1928（昭和 3）年 3 月 16 日、帰省中の鹿児島で死去した（名越、2017）。

時代の流れに翻弄されて、田代安定の地域開発への夢は実現しなかったが、彼の残した資料の学問的な価値は今後ともその輝きを増すであろう。関係のみなさんのご努力に感謝するとともに、読者がその社会的意味を考えながら、今後この資料集を多面的に活用していただくことを期待している。

引用文献

安渓遊地・安渓貴子他（2007）. 『西表島の農耕文化：海上の道の発見』法政大学出版局.

笹森儀助・東喜望（校注）（1982）.『南嶋探験 1』平凡社.

田代安定（1917）. 『日本苧麻興業意見』国光印刷.

田代安定（日付なし）.「履歴書」「駐台三十年自叙史」沖縄県立図書館天野鉄夫文庫 https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/Data/cat37/library05.html

田代文庫 （日付なし）. 台湾大学図書館 https://doi.org/10.6681/NTURCDH.DB_NTUDARC/Collection

田代安定（2021）. 「東京大学理学図書館所蔵田代安定資料」https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/tashiro/page/home

陳偉智（2020）.「田代安定：博物學、田野技藝與殖民發展論」國立臺灣大學歷史學系博士論文.

中生勝美（2011）.「田代安定伝序説：人類学前史としての応用博物学」『現代史研究』7: 129–164.

名越護（2017）. 『田代安定：南島植物学、民俗学の泰斗』南方新社.

奈良県庁（1909）.「柴田圭三」『大和人物誌』三光堂.

松崎直枝（1934）.「隠れたる植物学者田代安定翁を語る」『伝記』1: 112–123.

三木健（1980）.『八重山近代民衆史』三一書房.

三木健（2004）.「台湾に田代安定の資料を訪ねて：幻の旧慣調査報告書の出現」沖縄大学地域研究所年報 19: 168–171.

宮里厚子(2021).「琉球王国におけるフュレ神父の足跡：その学術的資料と手紙から読み解く」『島嶼地域科学』No.2: 1–17.
宮本常一・安渓遊地（2025).『調査されるという迷惑・増補版』みずのわ出版.
柳田国男（1934).「島の三大旅行家」『島』（昭和 9 年前期): 577–584.
やまだあつし（2019).「高等農林学校と植民地の知：鹿児島高等農林学校での田代安定の講義を中心に」『植民地帝国日本における知と権力』295–325、思文閣出版.
やまだあつし（2022).「田代安定の台東調査と『台東殖民地予察報文』」『人間文化研究』38: 149–166.